

2009 年度第 2 回「ロシア政治・外交」自主講座

「知られざる日ロ関係：友好と理解」

日ロ関係の歴史をもっぱら敵対的な関係の歴史であったと考えるのは間違いである。日ロ関係の歴史は、実は友好と相互理解を深めてきた関係でもあった。しかし、1917 年以降のボリシェヴィキ政権の成立後、ロシアを敵視してきた日本政府は、あえて友好の歴史を記憶の奥底に閉じ込め、冷戦期にはいっそうロシア敵視政策を強め、その冷戦の後遺症は、なお今日に至るまで癒えていない。

1. 日露和親（通好）条約調印とヘダ号

- 1843 年 7 月 10 日 海軍少将エフフィーミー・ワシーリエヴィチ・ブチャーチン（1804-83）のシベリア委員会への意見書
アヘン戦争後の 1842 年の南京条約締結を踏まえ、英国との競争に負けないよう全権代表を中国に軍艦で派遣し、あわせてサハリン島などの探検と日本との交渉の再開を提案。「レザーノフ使節の場合と異なり、船を直接に首都の江戸の港に入れば成功がより期待できるように思える。長崎ではオランダ商館の商人が交渉を妨害するべく万策を尽くすだろう」。ニコライ 1 世は提案を受け入れ、8 月 28 日、日本皇帝宛親書に署名したが、対英政策で慎重な外相・蔵相に反対され、派遣延期となる。
- 1852 年 3 月 艦隊を派遣し日本に開国を求める計画が米国にあることがわかる。
5 月 ロシア、日本への使節派遣を決定し、ブチャーチンを使節に選任。
10 月 19 日 ブチャーチン、バルラダ号で、サンクト・ペテルブルクのクロンシュタット港を出港し、英国ポーツマス港に向かう。
11 月 24 日 米国、ペリー艦隊、日本へ向け出発。
- 1853 年 1 月 30 日 ロシア、ブチャーチン艦隊、日本へ向け英国ポーツマス港を出発（英国で船を調達）。
3 月 11 日 ニコライ 1 世の 1853 年 2 月 27 日付「ブチャーチン提督に対する追加的訓令草案 730 号」
通商上の利益の達成こそ真に重要であるので国境問題については寛大でよい。つまりクリル諸島のうち、ロシアに属する最南端はウルップ島でよい。日本の国法に従い、江戸ではなく長崎に入港せよ（もと長崎商館医師でドイツ人シーボルトの提案）。
夏 ブチャーチン艦隊、喜望峯を周り、シンガポール、香港を経由、小笠原諸島父島二見港に到着し、東洋艦隊の 3 隻と合流して、バルラダ号を旗艦とする 4 隻の艦隊を編成。このときニコライ 1 世の訓令を受領。
7 月 8 日 米国ペリー艦隊（旗艦サスケハナ号以下 4 隻）、江戸湾・浦賀に入港。
8 月 22 日 ブチャーチン長崎入港。宰相ネッセリローデの書簡の受け取りを要請。
9 月 21 日 日本側、ネッセリローデ書簡を受け取る。
10 月 4 日 トルコ、ロシアに宣戦布告（クリミア戦争勃発）。
11 月 1 日 ロシア、トルコに宣戦布告。
11 月 8 日 筒井肥前守政憲、川路左衛門尉聖謨（としあきら）、露西亜応接掛に任命され、長崎へ出立。
11 月 18 日 ブチャーチン、いったん長崎を出港。
- 1854 年 1 月 3 日 ブチャーチン、長崎に再入港。
1 月 18 日 ブチャーチンと日本側全権・筒井肥前守政憲、副全権・川路左衛門尉聖謨との交渉開始。
2 月 5 日 第 1 次交渉終了し、ブチャーチン、長崎出港。
2 月 21 日 クリミア戦争でロシア、英仏に宣戦布告。
3 月 28 日 英仏、ロシアに宣戦布告。
3 月 31 日 日米和親条約締結、日本開国へ。
10 月 21 日 ブチャーチン、ディアナ号で、箱館入港。
11 月 8 日 ブチャーチン、大坂湾に入る。幕府、下田回航を要請下田入港。
12 月 4 日 ブチャーチン、下田入港。
12 月 22 日 日露、第 2 次交渉開始（下田玉泉寺）。
12 月 23 日 安政の東海大地震（推定マグニチュード 8.4）起こる。
この地震の起こった日は旧暦では嘉永 7 年 11 月 4 日であり、安政元年は旧暦 11 月 27 日から始まるが、一般にこの地震を「安政の東海大地震」と呼んでいる（なお、翌 1855 年 11 月 11 日・旧暦 10 月 2 日の「安政の大地震」とは別だが、混同している文書が多い）。この地震により、13 メートルの津波が下田港を襲い、ディアナ号損壊。下田はほぼ全滅（総戸数

- 856 戸のうち 813 戸流出、25 戸半壊)
- 1855 年 1 月 19 日 ディアナ号を西伊豆の戸田（へだ）で修理することになり、戸田沖まで曳航するも暴風雨で海が荒れて漂流、宮島村（現富士市三四軒屋）沖で沈没。宮島村村民も安政の東海大地震の被害を受けていたが、乗組員を救助。
- 1 月 24 日 幕府、戸田村（戸数約 600 戸、人口約 3000 人）でのロシア艦建造を許可。同日、ロシア使節団約 500 人、戸田村に到着。プチャーチン提督、幕僚、士官用宿舎は宝泉寺、下士官用宿舎は本善寺と決定。西洋式帆船の建造が戸田の船大工の手により始まる。
- 1 月 31 日 交渉再開（下田）。
- 2 月 7 日 日露和親（通好）条約（下田条約）調印。
- 5 月 8 日 プチャーチン、ヘダ号で出港。

参考文献： 大南勝彦『ロシアから来た黒船』（静岡新聞社、1991 年）

2. 皇太子ニコライの訪日

2.1. ニコライ 2 世の日記

ロシア帝国最後の皇帝ニコライ 2 世、51 冊の日記を書き残す。

1882 年（14 歳）から銃殺される 3 日前の 1918 年 6 月 30 日（西暦 7 月 13 日）まで

ニコライ 2 世の日記はモスクワのロシア連邦国立アルヒーフ（史料館）に保存されており、1983 年 9 月（当時はソ連中央国立十月革命史料館）、外国人としてはじめて日本の保田孝一岡山大学教授が閲覧した。



保田孝一は『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記』を書き、ニコライ 2 世が「大津で津田三蔵に切りつけられたことを根に持ち、日本人を『猿』と軽蔑し、日露戦争を仕掛け、日本を征服しようとした」人物であったとの俗説を覆すニコライ 2 世像を描き出した。

2.2. 皇太子ニコライ（当時 22 歳）の訪日

2.2.1. 旅程（1890 [明治 23] 年 11 月 4 日～1891 年 8 月 16 日）

軍艦「アゾフ」号で、オーストリアのアドリア海に面するトリエステ港 [現イタリア] を出港

エジプト（ナイル川をアスワンまで遡行）、スエズ運河、インド、セイロン（現スリランカ）、シンガポール、ジャワ島、サイゴン（現ホーチミン）、ショロン（ホーチミン郊外）、バンコク、香港、広州 [コワンチョウ]、揚子江を漢口 [ハンコウ]（現武漢 [ウーハン]）まで遡行、長崎（1891 年 4 月 27 日～5 月 5 日）、鹿児島、神戸、京都、大津（5 月 11 日）



2.2.2. 日本旅行の詳細

4 月 25 日 「私の心はずっと以前から長崎にある。予定より 2 日前に長崎に到着できるのがうれしい。そこでの停泊はすばらしいという話だ。」

4 月 26 日 「日本旅行の準備のために『お菊さん』を読み始めた。」

 ビエル・ロティ著『お菊さん』（1887 年）＝淡い恋愛小説で、これを読むと長崎が好きになるといわれる。

4 月 28 日 「12 時に有栖川宮威仁 [たけひと] 親王が艦にやってきた。彼は 1889 年にガッチナ宮（サント・ペテルブルク郊外の離宮）を訪れたことがある。好感の持てる人物だ。」

 有栖川宮威仁親王は日本側接待役

 「長崎市の家屋と街路はすばらしく気持ちのよい印象を与えてくれる。いたるところ掃除が行き届き、こざっぱりしていて、彼らの家の中に入るのが楽しい。日本人は男も女も親切で愛想がよく、中国人と正反対だ。とくに驚いたのはロシア語を話す人が多いことだった。」

 この日ニコライは 7 軒の商店を訪れた。江崎鑑甲店にはそのときにニコライが名刺代わりに与えた「善人 江崎栄蔵殿 皇太子ニコライ」と署名のある肖像写真が現在でも残っている。また当時の長崎はロシア東

洋艦隊の越冬地で、同市稲佐にはロシア人将校・水兵の家があり日本人妻、使用人、出入り商人など、ロシア語を話す日本人が多くいた。稲佐の悟真寺は現在でもロシア人墓地として有名。このロシア人墓地には、ゴルバチョフ・ソ連大統領が 1991 年に訪日した際、訪問した。悟真寺とロシアの縁はブチャーチン来航時の宿泊先だったことに起因

- 「昼食の後に右腕に竜の入れ墨をする決意をした・・・竜は見事に彫られており、腕はまったく痛まなかった。」
- 5 月 4 日 「稲佐村のグリツィン（長崎駐留将校）宅へ直行した。そこで何人かの将校の奥さん（日本人妻）と知り合いになった。・・・彼女たちの間に座る。彼女らはみなロシア語をしゃべり非常に好感が持てる。」
- その後（日本側その他の史料によると）、ロシア仕官寄宿所、福田半造方に行き、そこで芸舞妓 5 名を招き、5 日午前 4 時帰艦。
- 5 月 6 日 鹿児島島の島津忠義邸を訪問。忠義の贈呈した薩摩焼の壺がエルミタージュに残されている。島津忠義・忠重親子はその後日露交流を推進。
- 5 月 9 日 神戸入港、午後 6 時過ぎ、列車で京都着。
- 5 月 11 日 大津で津田三蔵巡査に切りつけられる。
- 「有栖川宮殿下その他日本人の茫然とした顔を見るのはつらかった。」
- 5 月 13 日 「日本のものはすべて 4 月 29 日（大津事件のあった日の露暦）以前と同じように私の気に入っており、日本人の一人である狂信者がいやな事件を起こしたからといって、善良な日本人に対して少しも腹を立てていない。」
- 明治天皇が東京から急遽京都の宿舎に見舞いに駆けつける。
- 5 月 16 日 日本旅行（上京）を中止し、ヴラジヴォストークへ直行せよとの本国からの命令が来る。
- 5 月 19 日 明治天皇、アゾフ号に行幸。この日までに多くの市民からの見舞いが届く。ニコライ、離日。

参考文献： 保田孝一『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記』（朝日選書、1990 年）
尾佐竹猛『大津事件』（岩波文庫、1991 年）

3. 宣教師ニコライの日記の発見

3.1. 宣教師ニコライとは

宣教師ニコライ（ニコライ大主教、1836 年 8 月～1912 年 2 月）＝幕末・明治期の日露文化交流の最大の功労者

しかし、文献資料がないため、いつしか歴史に埋もれかけていた

1912 年（明治 45 年）2 月のニコライの死後、ニコライの書き残した日記その他の文献資料は関東大震災（1923 年）で全て焼失したと信じられていたため、神田ニコライ堂（日本ハリストス正教会復活大聖堂）の創建者である宣教師ニコライ（ニコライ大主教）は、名は知られながら知られざる人物であった。

1979 年、中村健之介・東大教授、ニコライの日記がレニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）の古文書館に保管されていることを確認。

3.2. 函館のロシア領事館の設置と宣教師ニコライの来日

3.2.1. 宣教師ニコライの生い立ち

1836 年 8 月 1 日（新暦 13 日）、イワン・ドミートリエヴィチ・カサートキン（宣教師ニコライの俗名）、スモレンスク県ペーリ郡ペリョーザ村の教会の補祭の子として生まれる。郡教会付属初等学校、郡神学校、ペテルブルグ神学大学を卒業し、「グロヴニンの手記（『日本幽囚記』）によって日本民族への愛情がわいた」ため、妻帯司祭ではなく修道司祭と



して来日。

3.2.2. 宣教師ニコライ来日までの経緯

- 1855 年 2 月 7 日 日露通好条約（下田条約）調印
- 1858 年 10 月 24 日 プチャーチン使節の中国語通訳であったヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケーヴィチ、函館のロシア領事館の初代領事として着任。同時にプチャーチン使節のディアナ号の艦付き司祭であったワシーリー・マーホフが領事館付き長司祭として着任。しかし、マーホフは着任時すでに 60 歳の高齢であったため、ゴシケーヴィチ、宗務院（国教ロシア正教の監督官庁）に後任の派遣を要請（日本において将来、布教が許可される可能性を示唆し、有能な司祭を求めた）
- 1860 年 6 月 23 日 24 歳のイワン・カサートキン、修道僧となりニコライという聖名を受ける
- 30 日 ニコライ、司祭に叙聖
- 8 月 1 日 ニコライ、日本へ向け出発（シベリアを馬・船で横断）
- 9 月下旬 ニコライ、ニコラエフスクに到着し、当地で越冬中のアラスカで宣教の経験を持つのちのモスクワ府主教イノケンティと出会い、聖書と祈禱書を宣教地の言語に翻訳し正教の土着化を計ることを教えられる
- 1861 年 7 月 14 日 ニコライ、ロシア軍艦アムール号で函館に到着、領事館に着任

3.3. 宣教師ニコライの活動

3.3.1. 宣教師ニコライ、日本を学ぶ

- ?~1864 年 ニコライ、西蝦夷警備のため派遣された秋田久保山藩兵とともに函館に来ていた軍医・儒学者木村謙斎に学ぶ
- 1864 年 4 月 ニコライ、航海術を学ぶため函館に来た新島襄（当時 22 歳、のちの同志社創設者）に学ぶ
- 1865 年 新島の脱国・渡米を助けた攘夷派官司の澤辺琢磨、最初の日本人正教徒となる
- 1869（明治 2）年初め ニコライ、日本宣教団設立の請願のため一時帰国。プチャーチン（下田条約締結後、海軍軍人から政治家に転進し、1861 年国民教育相、その後国家評議会議員に勅任）、これを支援
- 6 月 20~27 日 函館五稜郭戦争
- 1871 年 3 月初め ニコライ、再び函館へ

3.3.2. 宣教師ニコライの布教活動

- 1872（明治 5）年 1 月 ニコライ、上京し布教活動開始
- 明治期の日本ハリストス正教会にはロシア人宣教師は最も多い時期でも 4 ないし 5 人（明治 10 年、在日外国人宣教師は、カトリック 45 名、プロテスタント各派 99 名）
→正教会は日本人伝教者による伝道が中心
- 1879（明治 12）年春 ニコライ、大聖堂建設資金募金のため一時帰国。プチャーチン、これを支援
- 1884（明治 17）年 プチャーチンの娘オリガ、日本宣教団支援のため来日（1987 年帰国）
- 1891（明治 34）年 3 月 東京ハリストス復活大聖堂（ニコライ堂）落成
- 1904（明治 34）年 2 月 8 日 日本陸軍、朝鮮の仁川に上陸
- 9 日 日本海軍、旅順港のロシア軍艦 2 隻を撃沈
- 10 日 日本、ロシアに宣戦布告
- ニコライの主教教書「神に祈りてなんじらの皇軍に勝利を賜わんことを求めよ」
ロシア駐日公使ローゼン、公使館全員の退去を決定。ニコライにも帰国を促すが、ニコライはとどまることを決意
ロシア正教会信徒をロシアのスパイ（露探）呼ばわりする風潮蔓延
ニコライ、ロシアの敗北に恥辱を感じる（愛国心の高揚）
- 1905 年 捕虜収容所での日露交流、兵士に対するニコライらによる慰問と教育
- 1912（明治 45）年 2 月 ニコライ、東京で没する（75 歳）。「遺業は、大聖堂 1、聖堂 8、会堂 175、教会 276、主教 1、司祭 34、補祭 8、伝教者 115、信徒総数 34,111 であった」

参考文献：中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』（岩波新書、1996 年）